

「中国哲学史」という概念の伝播と発展

日中交流の視角から

陳 威璿 (CHEN Wei-chin) *

本発表では、「中国哲学史」という概念に関わって、1916年以前の日本と1916年以後の中国において書かれた中国哲学史の通史を通じて、今までの発展を考察し、今後の研究方向について考えたい。

現代学科体系の視角から、「中国哲学」と「中国哲学史」の概念の始まりが日本の明治時代に見える。「支那哲学」(中国哲学)を含む「東洋哲学」の教育のために、当時は中国哲学史を撰述するのが必要になった。1916年以前、松本文三郎、遠藤隆吉と高瀬武次郎はそれぞれ『支那哲学史』を書いた。それはいまの中国哲学史の最初の様態で、当時の日本が西洋哲学を通じて中国哲学を構成するの試しであると言える。哲学性を重視するので、宋、明の部分に朱子学、陸王学派しか考察しない、などの特徴もその頃に成立した。その後、日本の中国哲学史の描き方は変化が起こったが(例えば狩野直喜『中国哲学史』)、中国に対する影響と言え、1916年以前の『支那哲学史』撰述のほうが代表的である。

中国の場合に、清末民初の知識人は日本に影響されて、日本の学術現代化の表現をこの頃に受容した。例えば梁啓超は日本語を学ぶのを唱え、明治時代の新語を受けたとともに、日本の影響によって「中国哲学」を研究していった。あるいは、王国維は若い頃に、藤田豊八などの日本人によって、西洋哲学を勉強して、中国哲学も研究し始めた。張之洞が京師大学堂を設けたが哲学科を設置しなかったので、王国維は反対意見を出し、日本の学科体系を参考し、中国哲学史を必修科目としての必要性を力説した。この形勢に従って、中国においても中国哲学史の本が現れた。最初の作品は謝无量『中国哲学史』(1916年)であった。しかしこの本は高瀬武次郎『支那哲学史』の単なる模倣に過ぎなくて、独創性が低い。日本の中国哲学史研究は、この頃にまだ中国に依拠されていたと言える。

胡適『中国哲学史大綱卷上』(1919年。後に『中国古代哲学史』に改称された)は中国において中国哲学史の重要な代表の一つであった。胡適は丁寧に史料の真偽を確認し、西洋哲学の方法を参考して中国の学説を整理し、学説の変化と社会との関係を考察するという方法を強調した。この本の内容は先秦の部分だけで、未完であった。そして学説と社会の関係を重視しすぎて哲学性は減った。それでも、胡適の方法論の意識が強かったので、大きい影響力を得た。

その後、方法論の意識を持ち、今でももっと大きい影響力を得たと言えるものは馮友蘭と勞思光である。馮友蘭がまだ史的唯物論に影響されていなかった時期に書いた『中国哲学史』は、彼に重要な地位をもらわせた。馮友蘭は積極的に西洋哲学を利用して中国哲学の範囲と規定し、その内容を解釈した。そのようなやり方は完全に新しい研究を示範したが、客観的に中国哲学の全部を理解しなかった。一方、勞思光『新編中国哲学史』も西洋哲学を利用したが、中国哲学の独自性は工夫論という概念を指摘したので、胡・馮両氏より進歩したと言えるけど、客観性も足りなくて欠点がある。

今後の中国哲学史の撰述は、前人の業績を踏んで、世界の哲学議題と対話することができたら、このグローバル時代に意味があるはずであると思う。

* (台湾) 中央研究院中国文哲研究所、ポスドク研究員。